

から八〇メートルほどの沖合で大規模な地震が発生し、海底もともに陥没したと見られる。正副船型の地震である。一九七八年七月の宮城県沖地震もこの付近で起こったことは記憶に新しい。

科学的な説明は省略するが(注3の曲線参照、マグニチュード八・二)仙台湾のはるか北方、牡鹿半島では地震発生五〜一〇分後に波が引き始め、さらに二五分まで引き続け、水位は最低マイナス八メートルまで下がった。それから瞬時に高い押し波に変わり、二〇分過ぎには最大一五メートルにまで上がった。それから約二〇分間、高さ一五メートルの津波が押し寄せた。多賀城付近の平野では、地震発生後三〜四分間から波が引き始め、五八分ごろまで引き続け、水位は最低一七メートルになった。それから高い押し波に急変し、地震発生から七〇分後に最高水位八メートルに達し、約二〇分間、津波が押し寄せた。

津波は、内陸の約五キロメートルまで到達し、甚大な被害をもたらした。宮城県の牡鹿半島から多賀城付近の平野(そして福島県の相馬あたりまで、約一〇〇キロメートル)の範囲にまで津波は遡上したはずである。水深一〇〜一五メートルに「大俣大明神」の遺跡が陥没してい

ることから、このような規模の地震だったことがわかるのである。  
もしも仮に「木の松山」が現在地であったならば、海岸線から約二キロメートル、旧大河から約一〇メートルに位置するから、津波が押し寄せたとき、この小山は大海の孤島のような状態になったろう。

以上、海底遺跡の調査から、とてつもなく大きな地震が起こったことが確認される。これは紛れもない事実であった。「日本三代実録」貞観二年(八六二)五月二十六日条に、この地域を大きな地震・津波が襲ったという記事がある(まほろ)。注すべきことに、右に紹介した科学的シミュレーションは、記事の内容と完全に合致する。

平安初期に大地震・大津波があった

『日本三代実録』の記事を、自分なりに翻読して解釈してみよう(『新訂増補国史大系』による)。

陸奥國の地、大いに震動す。流光、星のごとく噴映す。暫くありて人民、叫び呼ばふ。伏して起つ能はず。或ひは墜倒れて圧死し、或ひは地裂けて埋瘞

す。馬牛は駭奔し、或ひは相舐り踏む。城郭・倉庫・門櫓・障壁、頽落して墮覆し、その数を知らず。海口呼吼し、声、雷霆に似る。驚濤、涌潮す。折廻し漲長して、忽ち地下に至る。海を去ること數十百里。滔々として其の甚深を弁せず。原野道路、惣じて塗炭となる。船に乗る者、山に登るに及び難し。溺死する者、千計り。資産苗稼、殆んど牙遺(「わずかな余り」)の意、無けんや。

陸奥國(福島・岩手・青森の三県を含む)に大地震があった。晝夜のように明るくなった。夜の出来事だろうが、最近の神皇正統記では、前日の朝方に光が発生したという。人々は恐怖に叫び、倒れて立てなかった。程だみを使われたらしい。家屋が倒れて圧死する人、地面の裂け目に落ちて死ぬ人もいた。

馬や牛は走り出し、互いに絡みあい踏みつけ合った。城郭・倉庫・門櫓・障壁は割け落ち倒壊し、その数は計り知れない。海鳴りは、まるで雷のようであった。大波が湧き起り、逆浪し、勢いを増して城の下まで押し寄せた。「城郭一城下」は、四府のある多賀城と見て間違いない。

いるまい。

津波は海岸から「数十百里」まで押し寄せて、その津がどこかわからない。野原も道路もすべて海になった。船に乗って逃げようとしたが、間に合わない。山に登ろうとしたが、できなかった。溺死者は千人ほどにもなった。財産も稲も穀物の種もほとんど失った。

このような状況は、マグニチュード八・三くらいの地震だったと推定される。「数十百里」まで津波がきたとあるが、当時の一里は約〇・七キロメートルだから、海岸から七キロメートルの陸地まで及んだことになる。宮城から七キロメートルの福島県相馬市まで到達したことになる。山川を破壊し、建物を傾倒・転倒し、人命を奪うというような甚大な被害は、それより狭い範囲、多賀城付近の平野の隅々に及んだと考えよう。

溺死する者が千人ほどあったとあるが、それは名も無き庶民たちではなく、主に多賀城に勤務する政府関係者である。死亡した庶民たちを入れれば、膨大な人数にのぼったであろう。

先に述べたように、この大地震・津波によって引き起こされた状況は、海底遺跡をもとにシミュレーションした結果と完全に合致する。